in Biz 起業しました

野間から地方を元気に

リバイタライズジャパン（京丹後）

京丹後市の山間部に位置する野間地区に今年4月、農産物販売やイベントの企画、医療・介護コンサルティングを手掛ける㈱リバイタライズジャパンが設立された。事業内容は多岐にわたるが、いずれも地域振興につなげる方針で、掲げる目標はただ一つ。「地方を元気にする」

【樋口大亮】

同社を立ち上げたのは野間出身の三本大介さん（37）。大学を卒業後、大阪の企業で医療・介護の経営コンサルとして働いた。仕事で全国各地を飛び回り目の当たりにしたのが、地方が衰退する深刻な状況。少子高齢化や人口減少で活力が失われ、病院・施設の経営が悪化する原因にもなっていた。

「地域にお金と人が流れる仕組みが必要だ」。切実に感じたものの、経営コンサルとしてできることには限りがある。そこで、思い立ったのが起業。全国の地方と同様の問題を抱える北近畿や丹後の地域振興に取り組もうと、同市弥栄町野中の実家を本社として事業に乗り出した。

本社を置く場所は自然豊かな山村地域だが、過疎化が著しい。活性化を図るために計画するのが、地元の米のブランド化。奇麗な山水が田に流れ込み、昼夜の寒暖差がある野間は、おいしい米が作れる条件がそろっている。これまでに行われた食味検査では、西日本有数の米どころである丹後の中でも野間のコシヒカリは高い数値を示している。

生産者の高齢化が進み継続的な栽培は厳しくなってきているが、三本さんにとっては「隠れていたコンテンツ」。「野間」を冠したブランド名を掲げ、今年の新米から販売を始める。パッケージデザインなどで品質を訴求し、価格はブランド米で知られる新潟県魚沼産と同程度の予定。都市部の個人や飲食店をターゲットにする。

丹後を盛り上げようと、イベントも企画。7月には写真投稿アプリ「インスタグラム」で最高賞金が30万円の写真コンテストを始めた。テーマは「丹後で過ごした楽しい時間や思い出のワンシーン」。参加者は同社の公式アカウント（@revitalize_japan）をフォローし、ハッシュタグ「#hotangonolife」を付けて投稿する。期間は11月30日まで。

賞品を提供する協賛企業も募集。スポンサーとなることで特別賞の設定や受賞作品の選定ができる。協賛企業の商品やサービスに関する投稿につなげるため、特別賞には「〇〇が写っている」などの条件を付けることが可能。コンテストを通して丹後と地元企業の魅力を発信する狙いだ。

また前職での経験を生かし、全国の病院・施設を対象にした経営コンサルも事業の一つに。自身のほかにもコンサルタントを育成し、丹後から他地域へ出向いて稼ぐ仕組みの構築を視野に入れる。

（同社は☎0772・66・3075）

リバイタライズジャパンを設立した三本さん。事業の一つとして写真コンテストを始めた

◆◆◆インタビュー◆◆◆

―開業の準備は？

実家の建物を利用し、大掛かりな設備が必要な事業内容でもないので、融資は受けずに開業しました。お金が掛かったのはホームページくらいです。

―現在の状況は？

医療・介護コンサルティングは前職のように行っています。その他の事業は、まだこれから本格化していく段階ですが、構想を知った事業者から問い合わせや相談が寄せられています。

―起業希望者へのアドバイスは？

明確なビジョンを持ってチャレンジしていれば、応援してくれる仲間は出てきます。ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）に取り組む企業が増え、これからは「地域のため」「社会のため」というような姿勢が大事になると思います。